

## 学校図書館を活用した、探究学習に役立つ取り組み

東京学芸大学 附属学校運営参事 古家 眞  
東京学芸大学附属小金井中学校 司書 ○井谷 由紀  
東京学芸大学附属国際中等学校 司書 ○渡邊 有理子

### 1. はじめに

新しい学習指導要領では、主体的、対話的で深い学びの実現が大きく取り上げられて、各教科の中で、アクティブラーニングの視点からカリキュラムが組まれることが重要となってくる。その際、探究的学習の基本となる横断的で多様な視点から、物事を見る力や、必要な情報を取捨選択する力、さらには書誌情報の記録の仕方を、図書館を使ったオリエンテーションで行えないかと考えた。そこで司書の専門性と教員との連携により、学校図書館活用が教科の探究学習に役立てられることを示そうと考えた。

### 2. 東京学芸大学附属小金井中学校の授業実践

本校では毎年4月に司書と司書教諭によって全学年にオリエンテーションを行い、情報収集の仕方や書誌情報の記録の仕方等の学習をしている。さらに昨年度の1年生には、5月の総合の時間に2度目のオリエンテーション「つなげよう3冊の本」を行った。授業の内容は以下の通りである。

- ①ルールの説明（司書教諭）：生徒に、各々1枚ずつカードをひき、そこに書かれたテーマに沿った本を3冊探すように指示。その際、すべて違う「類」から探すことを徹底する。
- ②類の説明（司書）：「犬」のカードを例にとり、4類の動物・6類の飼育・3類の社会福祉・9類の文学作品等、様々な類から探すヒントを与える。
- ③書誌情報の書き方の説明（司書教諭）：「書名」「著者名」「出版社」「出版年」の4項目を、奥付を見ながら書くように指導。
- ④（以下はすべて生徒の活動）カードを引いて探索活動。 ⑤ワークシートに書誌情報・類・テーマのつながりを記入。⑥仲間のワークシートを読み合い、「ベストなつながり」と思うものに、シールを貼る。⑦もっとも票を集めた生徒によるスピーチ。 ⑧感想記入。

テーマは、自校の蔵書や生徒の実態を考慮して50種類以上を選定した。「窓」「目」などの実体のあるものから、「新」「大」など抽象的なものまで、なるべく多様な蔵書に触れるようにと考えて選んでいる。授業の目標は、今まで知らなかった世界に気づき、新しいものの見方を得ることとした。一人一人が実際に書架を回り、積極的な活動の中で本の世界を広げ、類や書誌情報の知識を得ること、さらに仲間との交流を通じてお互いの考えに触れて学びあうことができることを目標として実践した。

### 3 東京学芸大学附属国際中等教育学校の授業実践

附属小金井中学校での「つなげよう 3冊の本」の授業を見学し、本校でも司書教諭と司書が連携して、中学1年生の3学期に2度目の図書館オリエンテーションとして実施した。本校でもこの授業をおこなった背景には、①学校図書館を活用した情報探索技能の向上、②インターネット資料と紙資料とを両立した情報活用能力の育成、③参考文献の書き方の徹底がある。50分間の授業の進め方は附属小金井中学校の事例（前ページ①～⑧）をベースにしているが、テーマカードには、国際バカロレア校として目指す学習者像の概念キーワードである単語「探」「知」「考」「挑」「開」などを加えて実施した。

### 4 生徒の活動のようす

両校ともに、入学時の図書館オリエンテーションでは館内案内や利用のしかた、図書の分類についての話が中心となり、情報探索にまで話を広げることはできていなかった。しかし国際中等の場合、中2という「課題やレポート」が増える学年の直前で実施したことで、生徒間に差が出始めていた情報活用能力とレポートの基本的体裁について、再確認する機会となった。今回この授業を実施した二校の生徒の多くが、関連資料は必ずしも一つの書架にあるわけではなく、想像力を広げて他の分類も確認することの必要性を感想としてあげており、授業の目標としていた「自ら関連性を探って資料を探す」ということについては、ほとんどの生徒が行うことができていた。また授業の後半では、他の生徒が選んだ3冊を閲覧する時間と、発表の時間を設けたことで、他の人の資料検索の着眼点を知り、個々の視点を広げることもなった。

### 5 今後の課題と展望

今回の授業は、50分間でおこなうには活動内容が多く、厳密なタイムマネジメントが必要であった。しかし授業全体の進行や評価は司書教諭がおこない、司書は分類のブックトークおよび資料探しに苦慮している生徒へのサポートにあたるなど、両者がそれぞれ専門性を活かしながら連携をしたことで、生徒は内容を理解し、活動結果には大きな差がなく終えることができた。

今回情報探索の授業に司書が加わったことで、授業を見学していた別の教員からは「図書の分類から学問の視点に結びつけて資料探しをおこなえる可能性を感じた。課題研究でテーマ設定をする生徒たちの指導にも有効」という感想を得ている。今後は今回の授業での学びを実際の調べ学習の際に応用できるよう、生徒が資料を探しに来館した際には、司書の継続したサポートの必要性と、どの学年でも一定の時期にこうした情報探索の活動の時間を確保できるよう、司書教諭を通じた校内への周知が求められる。

学校図書館は教育現場にある図書館であり、読書センターおよび学習センターとしての使命がある。司書と司書教諭の連携により、生徒の学びを支援する図書館を使ったアクティブラーニングとして、今回の授業は中学校のみならず小学校や高校でも実施は可能であろう。